



西を冒してこきぎの以来
 訪は定めて慰問題もあ
 昨日と必き尺子なる吊
 右戦のありうる事とあ
 ざいれを陣のいなり
 將軍の兵法逐一風
 りあり

志秋面自くお尺ら
 部下の巻目寛まりるが
 割目して待ら

兩蕭々君と對を
 語らばまツと好話のあり
 なるぶきあ今日もあ
 ありは大小残念と

海より音信は無きや
 此方へあぶきとて因
 魔も時候がら塩辛が
 まいりも知れん

小橋跡に小説や常子
 やりつけえ見たり昨夜徹
 夜の影傷みぬ乱眼
 成るほど若さを揺ら
 僕も~~ま~~ちちちを空想わ
 とありあは是より以後

立御危き理想の中と
 彷徨してさき美感の
 蕉子眠らぬのみ南無



とありぬ是より以後
立御危き理想の中
彷徨しとてきく美感の
蔭に眠らんのみ南無
信女信女去る

天下多事あり、高秋
因起ゆるの時ありく
勉むべし、唯恐る紅塵
我を埋没して一箇の賣
文郎となるらんを
足よえよ今更らば
及ばぬと●明治の詩人の
境界も亦あたらぬなら
んや

遠くは不思議あり。彼の力
を測るべからん。彼を神なり。
此神たる左の手に酒酒を持
ちて右の手に剣を持たり。
彼が手に散らばる花は
花を押しこみ。酒も酔ふ
べし。剣も刺さるべし。
さうして花も迷ふべし。

九月三日 中 天園

遠く山楼の主人
理想の姓

本所より見た事
状別れのわく

本所より只今本
状別紙の如く
年より今更なる
所存、甚だ然
と云何我々の
もやまゝと
あるは
先ん之の
と云や
お
互
お
大
を

二〇九 慚悔

小所又

オイヤ、云は
事
何
か
あ
知
調
時

川上眉山手柬

江見水落


本間文庫

文庫 14

C 70

